

# 熱田同窓会報

## ごあいさつ

学校長 鈴木 元一

去る3月1日、全日制第22回生447名、定時制第9回生41名の諸君を、新たに社会に送り出しました。これらの諸君を含めて、卒業生総数は9,200名に達



しました。戦後の昭和28年に開校された本校も、来年度で25周年を迎え、いよいよ青年期に達するのであります。卒業生総数が1万名の大台に達する日も近く、また、卒業生の社会的活躍も年々高まりつゝありますことは、まことにご同慶の至りであります。

こゝで、学校の近況について、一言申し上げたいと存じます。ご承知のとおり、昭和48年度入学生から学校群制度が実施されたのでありますが、幸い、本校におきましては、女子の批率がやゝ増加したことを除き、余り大きな変化はないように存じます。生徒諸君の生活態度が従前よりだらしなくなったのご批判を卒業生の方々より時々受けますが、この点につきましては、今後とも一層の努力をいたしたいと存じます。大学の進学成績につきましても、クラブ活動等につきましても、相当頑張っておりますので、ご不満な点もあると思っておりますが、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。特に、サッカー部の全国高校総合体育大会出場に際しましては、格別のご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

終りになりましたが、同窓会も益々会員数が増大いたしてまいりましたので、会長はじめ役員の方々のご苦勞は並大抵ではないと存じます。しかしながら、卒業生にとりましても、在校生にとりましても、同窓会の存在は心の支えであります。何とぞ今後ともご尽力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 発刊にあたって

会長 佐々木 元彦



若葉の芽、ふくらみかけた季節になり、物みなすべて暖色に、みずみずしさを加えつつある今日このごろになりました。諸先生ならびに同窓会員の皆様におか

れましては健祥におすごしのことと思います。

ひごろ本会につきまして種々のご高配いただき、有難とう御座居ます。

1 昨年は同窓会創立20周年記念式典を中日パレスにて実施し、旧師の方々、同窓会員の方々、多数のご参集をいただき盛大の内に式典を催せたことは私共役員一同感激にたえません。これもひとえに皆様方が「熱田」をふるさとの1つとして心の中に留めおかれたたまものと確信します。

本年3月1日卒業式において、全日制第22回生、447名、定時制第9回生41名を同窓会員としておむかえし、本会も9,200名の 大世帯に発展してまいりました。私共先輩として彼らの今後の健とうを祈り立派な社会人として、学生として巣立たれるよう心から祈りたいものです。

本年度は、同窓会行事の1つとして会報を発行し同窓会熱高の便りをお知らせする次第です。

最後に、私共々、母校の訓とう「品格ある人間」、「気力ある人間」、「健康な日本人」を心に秘め、ますます、立派な社会人として互にせっさたくまし、発展していこうではありませんか

## 熱田高校同窓会総会案内

昭和51年度総会を下記のとおり実施いたしますので、万障お繰り合せの上ご出席ください。

記

- 1. 日時 昭和52年8月28日(日)
- 1. 場所 14時開会 ~ 16時30分閉会
- 1. 場所 熱田高校体育館
- 1. 会費 無 料

楠によせて



初代校長 積木 倫一

“早春の光がかよう”という字句は、卒業式の案内状にいつも使っていたためか、3月のくるこの頃、とくにこの季節感を深くし、熱田を思い出すのですが、

その中の1つに、このかかよう光をうけて、運動場に枝葉をのばす1本の楠の姿が浮かびます。

創設の頃、いちようと楠の並木を作り、東大のいちようのように、神宮の大楠のようにと大きな夢を托し、堂章も亦この楠の葉を3枚組合して、品格ある人間など三つの人間像を意味づけ、熱田の将来に希望を大きくしたのでした。ところが34年のあの伊勢湾台風の来襲に、これらの企てはヘドロの海になぎ倒されたかと茫然とした惨状の中を、よく耐え、生き残ったのがこの楠で、52年の今日、数本の根を高く上げ、太く生い茂っています。

この1本の楠の壮んな生命力を想うにつけ、あるいはこの楠の木影で未来を論じ合い、あるいは堂章のもとに若人の力をぶっつけ合った当時の皆さんが、現在、どんなにか成人され、社会の中堅として、どんなにか活躍され、成長されて行くことか、“緑あり千年へて”と、目に見える思いですが、共にした熱田の過去を語りかけたそうこの楠の風情に、言い知れぬ親しみを覚え、熱田のシンボルトリーといった尊さを抱かずにはおれません。

今回、新しく同窓会会報を刊行されます由、何よりとお喜びします。“光あり”、“緑あり”と歌いつがれて、31年の第1回生から、今年は22回目の卒業生が加入されますとか、会員数は1万何千名ということでしょうか。名簿の厚みはそのまま熱田の歴史につながり、皆さんの氏名の間にただよう若い日の思い出は、そのまま心のふるさととしての母校につらなるものと考えます。この会報を手になされ、改めて同窓の団結を高め、母校の発展に努力されますよう念じまして、想いの一端とともに、発刊のお慶びを申しのべます。

『緑あり熱田』

二代校長 藤野 源次

毎年届けていただいている校誌「熱田」を拝見して大変なつかしく感じています。それと同時に年ごとに発展

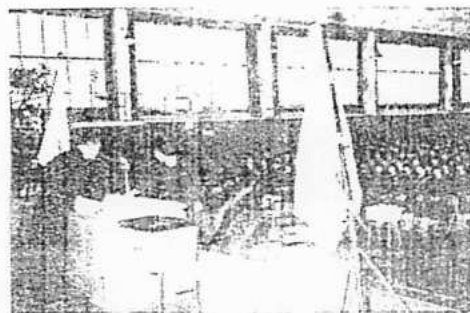


向上を遂げている熱田高校の姿をみて言い知れぬよろこびを感じています。私が熱田高校に赴任したのは、伊勢湾台風が襲ったあくる年の昭和35年の春でした。

一応学校は平常に戻っていたとはいえ、先生方の顔にはまだ疲労の影が窺われ、如何に被害が甚大であり、被災地の学校が果たした役割の大きかったかを痛感しました。それから昭和43年3月までの8年間第二代校長として勤めたわけですが、当時を顧みて感じ、いまなお感謝していることは、先生方が和気霽々として教育に尽瘁して下さったことであり、また、当時の生徒諸君が学業に、クラブ活動等、学校生活全般にわたり真剣に努力精進してくれたことであります。当時の卒業生には“よくしぼられた・鍛えられた”という記憶が残っているかも知れません。これは熱田高校の初代校長積木先生時代に培われた創学の精神が継承されたものであると思います。

この3月第22回の卒業生諸君を送り出すまでに熱田高校が成長発展したことは、この上もない喜びであります。何時までもこの創学の精神を伝承していただきたいと念願するものであります。

ただいま中京大学に勤めていますが、時々卒業生諸君や先生方と会合した際、校歌をうたうことがあります。そのたびになつかしい熱田高校の姿が眼前に映ってきます。私の在職中にやっと図書館やプールが整った当時とは異なり、現在では校舎も整備され、運動場は拡張され、諸施設も充実されて見違える学校になりました。学校と卒業生とは連帯の絆に結ばれています。卒業生諸君のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。



定時制第九回  
全日制第二十二回  
卒業証書授与式

古参教員の弁

塩谷 典

昨秋から月に2・3度、大学時代の恩師の仕事の一部手伝うために、伊勢に出かけることにしています。伊勢は私の中・高校時代に学んだ古里でもあります。旧制の

宇治山田中学校の校舎は、第二次世界大戦の末期に、日本のあちこちが焼きはらわれた時、その例外になりませんでした。焼かれた後はあちこちでの借家授業が続きましたが、その中でも特に倉田山での勉強が最も印象に残っています。近鉄の宇治山田駅からおなり街道の赤煉瓦の坂道を登って20分も行くと、小さな山と山の間に道は入り、現代風の建物が急に見えなくなって、両側から松の大樹が道を覆います。そのようなだらだら坂を100メートルも行くと、左手に大きな黒い四つ足門があり、それをくぐって急坂を50メートルほど登ると唐様造りの屋根が見えます。そこがかつて私が学んだ母校の職員室のあった建物です。(現在は皇学館大学の付属高校の1部)。さらに少し行った松の老木の中に椴皮葺きの平屋の建物が、辺りの自然にすっかりとけ込んでいかにも閑静に建っていますが、それが神宮文庫なのです。高校時代の余暇はその閲覧室に入って漱石や鴎外を読み、大学時代には小さな資料室を借りて古文書を調べた懐かしい所です。

20数年ぶりに立ち寄ったここで、松やにの匂いや玉砂利の足音に往時の一時を懐しく思い出しました。最近の都会生活の中に在って、忙しくぎすぎすと生きている私にとって、森あり山あり清流のあるこの伊勢下りが、しだいに私の心に潤いを回復させてくれる思いなのです。

昭和44年3月に、本校定時制第1回の卒業式で1クラス47名の人と送別し、昨年3月までにちょうど400名の青年が卒業していきました。そして、この3月1日に2クラス41名が巣立って9回目、私も熱田高校で、441名の卒業生との惜別を味わったわけです。いつもながら、定時制の卒業式は感動的であり、哀惜の情がひとしお深く、教師として最も淋しい日であり、かつ嬉しい日でもあって、複雑な夜なのです。

このようにして学業を全うした人たちが、時あって学校に立ち寄って下さるのは、教師としてこれまた嬉しく懐かしいものです。気がねなくぜひお立ち下さい。今でも古い卒業生たちが、何ということもなくやって来て、同級生の情報などを聞かせてくれたりしています。卒業生の皆さんのためにも古参教員ひとりぐらひは、この熱田高校にもいてよいように思います。学校教育の中味には、きわめてラディカルな原理を基軸とする保守の側面と、日々新しく研究された成果をもって営まれる進取な側面とが同時に要求されます。同一校に永くいると、教育という仕事の斬新性が稀薄となり沈滞するという面が危惧されます。その点で、永年勤続者は特に留意しながら日常的に教育研究を意欲的にすすめねばならないで

しょう。教科の科学的な内容と、誠実に生き続ける力を青年に育てていく両面が、学校教育には求められています。

私自身が中・高校時代を生きた伊勢路を懐しむように、皆さんにとっては、人生の一時がこの熱田高校の夜の学校でもあってまた懐かしい所であろうと思います。いつまでも古さと新しさを統一しながら発展していく学校にしなければと、古参教員の1人として責務を感じながら、私もすでに本校の定時制で11回目の春を迎えようとしています。

現在までの卒業生数

全日制		定時制	
回生(年度卒)	人数	回生(年度卒)	人数
1 (31)	159	1 (44)	47
2 (32)	163	2 (45)	40
3 (33)	258	3 (46)	44
4 (34)	249	4 (47)	60
5 (35)	274	5 (48)	58
6 (36)	272	6 (49)	49
7 (37)	386	7 (50)	52
8 (38)	387	8 (51)	50
9 (39)	365	9 (52)	41
10 (40)	384		
11 (41)	547		
12 (42)	598		
13 (43)	549		
14 (44)	522		
15 (45)	491		
16 (46)	467		
17 (47)	451		
18 (48)	444		
19 (49)	447		
20 (50)	448		
21 (51)	451		
22 (52)	447		
計	8,759	計	441

久しぶりに母校を訪ねて

定時制1回生 西野 正男

熱田高校定時制が生まれたのは昭和40年、その1回生としてわずか1クラスで出発した定時制も、今では12年の歴史をもち9回目の卒業生を送り出しました。

10年1昔とか、私達1回生の学生時代を振り返るとずいぶん昔の事のように思えるのは、それだけ時をとったせ



このたび熱田高校定時制の古参である加藤先生より同窓会の書記をまかされ、現在この会報の紙面をいかにしてうめようかと、そんなことばかりを考え、そして考えているうちに原稿のメ切が近づき、あわててこの文？を言っている次第です。

教えられる側から教える側となった自分をいまだ把握できずいまだに半人前で各先生方に迷惑ばかりかけている次第です。この3年間をふりかえってみれば思い出すのは失敗したことばかりで、これといった良い事は何一つ思い出せないといった有様です。失敗するたびに各先生方に適切な御指導をしていただいて申し訳ないと思っている、と同時に深く感謝の気持ちをいただきます。いろいろ書いているうちに、何であれ教育することの難しさというものを痛切に感じます。1つの言葉でさえも生徒はいろいろな意味でとらえます。いかにしてそれを適切な意味で把握させいかにして向上させていくかを考えてみると自分にとって人を教育するなどということに対して考えもつきません。反省材料はいくらでもできます。しかしここに務めている間は自分自身を冷静に見つめ、また自分自身冷静にものごとを考えられるようになりたいと思っております。

明治大	8	6	14	10	名保短	3	0	3	5
早大	0	6	6	8	岐女短	4	0	4	3
青学院大	4	2	6	3	淑徳短	19	1	20	19
東海大	2	3	5	3	金城短	15	2	17	24
日体大	4	1	5	1	椋山短	8	0	8	3
専修大	1	3	4	4					

愛知県立熱田高等学校同窓会会計報告  
(昭和50年5月28日～昭和51年12月31日)

収入の部

前年度繰越金	3,490,176円
第21回生入会金	1,002,000
預金利息	379,578
総会参加者徴収金	647,000
同窓会名簿及広告費	820,000
<b>合計</b>	<b>6,338,754円</b>

支出の部

1. 創立20周年式典関係

総会案内印刷及発送	146,570
贈呈記念品料	314,300
中日パレス会費支払	1,355,106
諸経費	63,405

2. 同窓会名簿関係

名簿印刷代	1,800,000
〃 発送費等	405,641

3. その他

式典及名簿作成委員会費	118,280
母校援助金(クラブ活動)	195,000
慶弔費	15,000
卒業生名簿贈呈	34,000
母校先生退職職饌別	54,000
諸経費(事務関係)	133,420

合計 4,634,722

差引残高 1,704,032円

上記の様にご報告申し上げます。

同窓会会計(19回生) 森 正年

上記を会計監査の結果相違ないことを認めます。

監査役 下出 義郎(1回生)

豊田 和弘(3回生)

進学状況報告 "増加する浪人"

昭和51年度大学合格状況

大学名	現役	OB	計	50年度	大学名	現役	OB	計	50年度
金沢大		2	2	1	芝浦工大	3	2	5	0
名大	10	6	16	7	名城大		17	56	52
三重大	8	10	18	11	愛知大	35	40	75	79
鳥取大	2	0	2	0	愛学院大	16	3	19	8
信州大	3	2	5	2	南山大	18	40	58	32
名工大	5	4	9	6	愛工大	25	4	29	22
愛教大	18	6	24	30	中部工大	10	2	12	10
岐阜大	13	3	16	17	金城大	4	2	6	2
横浜市大	0	3	3	1	淑徳大	7	0	7	2
名市大	5	2	7	6	椋山大	6	0	6	3
県芸大	1	3	4	3	同志社	1	4	5	7
県立大	3	6	9	8	立命館	9	10	19	28
慶応大	1	1	2	2	関西大	0	8	8	13
中央大	1	9	10	7	関学大	2	2	4	4
日本大	5	8	13	8	県女短	9	0	9	1
法政大	6	1	7	0	名市短	9	2	11	6

## インター・ハイ出場の思い出

304 田畑 公宏

インター・ハイ県予選の決勝戦で中京高校を1対0で破り、3年連続インター・ハイ出場を決めた。

東海総体、名南ブロックリーグなど十数試合、炎天下の猛練習を経て、7月30日いよいよ日本一の信濃川が流れる新潟へ向かって出発した。

8月1日、明日は試合だ。みんなも少し緊張しているようだった。2回戦で当たる帝京高校の練習を見て、その後練習し旅館へ帰ったが、布団に入ると明日はああしよう、こうしようなどと考えなかなか寝付かれなかった。

8月2日、いよいよ決戦の日が来た。みんな朝から緊張しているようだった。午前9時、開会式が始まった。はなやかな行進の後、開会宣言や選手宣誓などを聞いていると、その雰囲気体が中に伝わり、全国大会に出場しているんだという実感がわいてきた。しかし回りを見ると強そうなチームばかりでだんだん心配になってきた。開会式が終ると、その興奮もさめぬままに、試合場へ向かった。試合前には、応援団の顔も見え、なんとしても勝とうと思った。

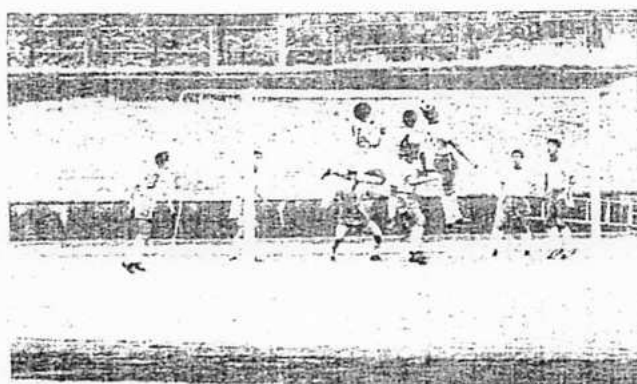
「ビー」、試合開始の笛が鳴った。敵は宮崎県代表の小林工業高校だ。前半、後半とも堅さがみられ両校とも何度かの決定的チャンスをものにできず延長戦へともつれこんだ。延長戦に入ると熱高イレブンは徐々にペースをつかみ、前半八分坪井のシュートが敵の手に当たりPKを得た。西川が冷静に右隅に決め、そのままタイムアップ、1回戦を勝ってほっとした。しかしこの勝利に酔っているわけにはいかない。2回戦は優勝候補の帝京高校だ。昨年準々決勝で当たり1対0で負けたあの時の雪辱戦だ。

8月3日、我々は闘志を内に秘め試合場へと向った。あいにくの雨だがスタンドには大勢の観客が集まっていた。いよいよ試合が始まった。前半1回戦不戦勝で雰囲気には慣れない帝京高校はパスが繋がらず熱田のペースで試合は進んだ。そして前半16分に右のコーナーキックから左ウイングの山本がボレーで決め先取点を挙げた。そしてハーフタイム。みんな「これはいけるぞ。」と思った。しかし、後半動きの鈍った熱田を雰囲気慣れペースをつかんだ帝京が攻め、アッというまに3点を取られそのままタイムアップ。

試合後、昨年新チームで出発した時は最低のチームといわれながら、ここまでよくやった、という満足感と、

もう少し力を発揮できたら……という悔しさが入り混じっていい衰わしようのない複雑な気持ちであった。しかし、昨年の先輩と同じように「やればできる」という教訓を改めて体で味わった。

最後に、いろいろとお骨折りくださった先生方、生徒会、同窓会、の皆さんに厚くお礼を申し上げます。



昭和51年 全国高等学校総体水泳大会 100m 平泳

## 体力の限界への挑戦

水泳部 浅野 豊志

これは昭和51年全国高校総体水泳の部100m平泳で第7位になった浅野豊志君が校誌熱田に投稿した文の抜粋である。

予選第1組3コース。となりの4コースは1年、2年と決勝で入賞している石原だ。後半はとなりについていけば全力が出しきれははずだ。3週間の猛練習で鍛えたことによって、前半からとび出していける自信があった。体調が最良の状態に到達したスポーツマンは、競技中体が従順になると言われるように、前半、瞬発力でもって泳ぎ、手で水をつかむようにかき、ブレストの推進力はフル回転した。そしてターン。ここからタッチまでは全速力!!だが、75mのところまで息が苦しくなり、手足の筋肉がしびれ、力をいれることができなくなってきた。

5m前!!しだいにタッチ板が近づいてき、ついにゴール。このペース配分が見事に成功し、ベスト記録1分12秒05で予選7位で通過、決勝9人の中に残った。泳いだことによって緊張感がはぐれ、ベスト記録をマークしたことによって気分的にさらに楽になった。決勝ではもっと記録をのばして6位に入賞しようと思ったが、全力で泳いだ後は体力が回復するのに時間がかかる。予選と決勝の間に2時間ぐらいいかないので、完全に体力を回復させることはできなかった。決勝!!第2コース。「ヨイ!!」……記録は1分12秒39 - 第7位

## 運動クラブの活動について

ここ数年の運動クラブの活躍には著しいものがみられ、特に、女子飛込において東海総体で優勝、サッカーは、3年連続のインターハイ全国大会への出場、全国ベスト8位に進出、女子陸上においても全国大会への出場を果たした。その他のクラブにおいても、地区予選を勝ち抜き次々と県大会への出場を果たしている。テニス部においては、女子の方が成績良好ということで、女子2面、男子1面というコート割当の変更が行われ、これにより男子も一層激しい活動を開始し、校内においても増々活動の隆盛がみられている。又、多くのクラブにおいて3年生の追い出しコンパと重ねてOB総会も開いている。クラブOBの諸君は、是非、今以上の愛着をもち、後輩の指導、助言に参加されるとともに、OB諸氏の親睦の場としてください。



### コンクールへの道のり



#### 吹奏楽部

吹奏楽の普及および演奏技術の向上を目指し、「昭和51年度吹奏楽コンクール」が開かれた。課題曲は藤掛広幸作曲「吹奏楽のための協奏的序曲」、自由曲にロバート・シェイガー作曲「高貴なる交響曲」を選んだ。8月10日、地区大会の日である。朝7時半集合、軽い音合わせの後、会場の市民会館へと向かった。皆、不安と期待で複雑な表情である。やがて、ステージに上り、指揮棒を見ると緊張ははぐれ、思ったよりは確かな演奏ができた。これ迄何十回と演奏した曲ではあるが、この一瞬の演奏により、金・銀・銅の賞が決まる。この日の我が演奏は目立ったミスもなく、目指した「金賞」を得た。県大会への切符が手に入ったのだ。8月22日、県大会にはシード校を含め6校が出場した。軽いウォーミングアップの後、楽器を積み出し、午後1時、会場の愛知県勤労会館に向かった。

予定通チューニングを済ませ、ステージの横で出番を待つ。他校の演奏がいやに良く聞こえる。さあ、我々の出番だ。心の不安を振り払いながら、暗転の中、それぞれ自分の席につく。照明がついた。観客の視線の全てが一斉に我々の方へ向けられたかのようなのである。アナウンスと共に指揮者の入場。今迄の緊張がややはぐれてゆく。指揮者のタクトに合わせ、聞き慣れたメロディーが流れ

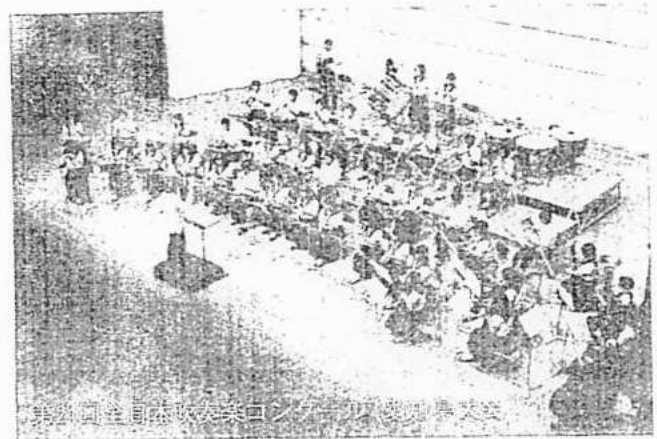
出す。精一杯心を傾けた本番である。やり直しは効かない。この一瞬に全てを賭け、いつものように演奏した。気が付くと拍手の中にいた。

皆、口には出さなかったがミスの多い事に気付いていた。県大会だというので気負い過ぎたのであろうか。地区大会はどうまくいかなかったようだ。発表された成績は「銀賞」。予想はしていたもののやはりショックだった。

けれども、敗れたとはいえ、青春の全てをこの日のために注ぎこんできた毎日の道のりは、我々にとってすばらしい体験であった。そして、流した汗は気持ちのよいものであった。敗れて悔い無し。この体験は高校時代の思い出として、我々の心に深く刻みつけられた。

一昨年、昨年とも今一步の所で手の届かなかった東海大会。この目標の達成は部にとって厚い壁とも言える。他校より圧倒的に少ない練習量を、何らかの形でカバーしなければならない。来年こそはこれを成し遂げ、東海大会への出場を果たしたい。

2月11日県アンサンブルコンテストが開かれ、我が熱田高校より木管五重奏、サキソフォン四重奏、金管八重奏の三チームが参加し、ともに「金賞」を得た。特に木管五重奏は県代表として3月20日の東海大会に出場する。昨年の東海大会では、最優秀の「金賞」を得たので、本年も何とか頑張り、是非ともよい成績を得たいと願っている。



### 文化クラブ報告

特に活動の顯著だった文化クラブの報告をしたいと思います。

美術：9月中旬に県美術館で高校展。下旬に文化祭。

11月、区役所で熱田区民展。

書道：6月、校内作品展。9月、文化祭と愛知県美術館での高校書道展。

演劇：4月に新入生歓迎公演として「狂言白書」を、また7月には、新人公演と合同発表会に、「神様と天火」を上演しました。9月には文化祭に、11月には地区大会、県大会で「他人の関係」を上演し、現在も中部大会出場を前に、「他人の関係」の劇づくりに励んでいます。例年より県大会・中部大会と2回も上演の機会を多く得

られたということは、より多くの人に我々のテーマについて考えてもらえるということなので、部員一同はりきっています。

文化クラブの最大の発表の場は、毎年9月下旬から10月初旬にかけて開催される「熱高文化祭」です。クラブの活動を細かに報告したいが、紙面の都合上させていただきます。

来年度は、新しい試みとして、4月中旬に「文化クラブ公開クラブ活動」を行なう予定です。1種のミニ祭と言えます。この活動で何とか沈滞気味な文化クラブを盛り上げようと生徒会が中心となり計画立案がなされています。



花あり  
海は深く 雲は白く  
和かに静き  
あかねの葉は熱田の  
若人の夢より

緑あり  
日々にあつて  
園土を耕りついで  
かほしくもんは野の  
若人の夢より

熱田高等学校同窓会報



(堂章)

緑あり  
千年経て用は  
すこやかに草や木  
森の静けさ熱田の  
若人の命より

昭和五十一年五月  
辰屋 世良 友  
作

題 字 名 郷 榮 助 先 生



熱田高等学校同窓会報	
発行日	昭和52年4月1日
発行所	〒456 名古屋市熱田区千年1の17の7 愛知県立熱田高等学校同窓会
編集者	会報編成委員会
印刷所	明治紙業